

文化財ノート No.36

稲城の梨づくり (二)

—大正時代～昭和30年代—

稲城市教育委員会
社会教育課

稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 2001. 3. 5



多摩川梨の出荷用ラベル

大正時代に入っても、梨の栽培面積は増え続けます。この時期には、梨の病虫害による被害も増えますが、東京府農事試験場による指導や生産者の努力により、梨の品質低下が食い止められます。大正8年(1919年)には、東長沼と矢野口の組合が合併して、稲城果実生産組合ができ、技術の向上、販路の拡大が進められました。大正時代中頃には富士川下流域の梨園の見学や梨の品評会、梨栽培の技術者を招いての講習会などが盛んに行われました。先進地の新しい技術が導入されたのもこの頃です。大正時代の末から出荷の容器が、竹かごから木箱に変わります。また昭和に入ると出荷方法が、これまでの荷車のほかに、小型トラックも利用されるようになります。

昭和2年(1927年)、多摩川沿いの梨生産組合が団結して、技術交流、出荷や資材、宣伝の統一、販路拡大などをはかるために、多摩川果物生産組合連合会が誕生しました。そして昭和7年には、梨の名称も「多摩川梨」に統一されました。また同年に多摩川梨の登録商標もでき、このマークは出荷用の木箱などに付けられることとなります。大正から昭和初期にかけて、稲城の梨づくりは、技術面、輸送面とも大きく前進し、近代的な梨づくりが行われるようになります。生産量も飛躍的に伸びてきましたが、昭和4年に始まった世界恐慌の影響が稲城の農家に影響を及ぼすこととなります。しかし、養蚕や米に比べて梨は、恐慌による痛手が比較的少なく、なんとか凌いで立ち直り、昭和10年前後には梨の栽培面積が100ヘクタールに達します。この時期が稲城の梨づくりの第1のピークといえます。

昭和12年の日中戦争突入の頃から、稲城村の農家にも戦争の影響が大きくなり始めます。戦地への応召・徴用があいつぎ、梨作り農家の人手不足は深刻になります。肥料や農薬、資材の不足も目立ちはじめます。そしてこの状況は昭和16年の太平洋戦争の勃発で一気に加速されます。昭和19年の梨の作付け面積は、最盛期の1/5にまで減少しました。食糧事情の悪化から梨栽培から麦や芋などの主食中心に変わったためです。この頃は多摩川果物生産組合連合会も自然解散の状態であったといわれます。戦争は稲城の梨づくりに大きな影響を与えました。

戦後の混乱もおさまってきた昭和30年代から、観光梨園による梨のもぎとりが始められます。食生活も安定し、家族連れや幼稚園、婦人会などの団体がもぎとりに訪れるようになります。昭和33年より農業協同組合の果実部が発足し、梨作り農家が組織化されます。昭和35年になると多摩川梨もぎとり連合会が生まれ、資材の共同購入や価格の統一からPRまでが行われるようになります。昭和37年には読売ランドが開園し、訪れる観光客も増えます。またバス会社との提携により、観光バスの乗り入れが始まり、昭和30年代の終わり頃には、稲城の梨園は完全に観光化し、訪れる観光客は関東一円に及ぶこととなります。

観光梨園として成長していく一方、梨の街頭販売も盛んになります。昭和30年代末頃には、川崎街道・甲州街道や鶴川街道などの道沿いには、二坪ほどの直売店が立ち並ぶようになり、その数は70軒を越えるほどになります。市場への出荷は少なくなり、街頭販売やもぎ取りが中心となります。戦争による打撃から立ち直った稲城の梨園は、観光梨園に転換したことが成果をあげ、昭和30年代に二度目のピークをむかえることとなります。

参考文献、『稲城市史』『多摩川梨変遷史』



多摩川果物生産組合連合会の登録商標

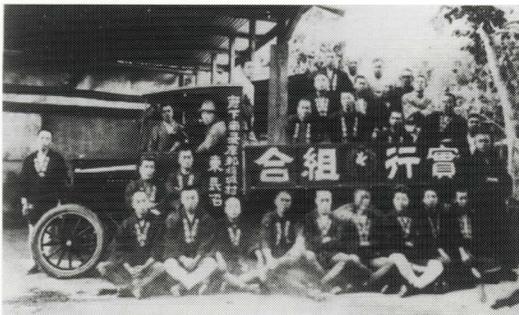
昭和7年10月3日付をもって公告された。かたかなのタマを中央に、そのまわりを漢字の川でかこんでいる。
『多摩川梨変遷史』より



梨の出荷箱と梨かご



梨の包み紙



東長沼農事改良実行組合が購入した梨出荷用のトラック（昭和8年頃）



梨畑の消毒（昭和25年、浜田英夫氏撮影）